

第3節 | 言語をめぐる闘争

モロッコ、アルジェリア、チュニジアにとってのアラビア語、ベルベル語、フランス語

以上、正則／近代標準アラビア語、および俗語（都市／地方）アラビア語諸変種などについて、その社会史的コンテクスト、すなわち、これらの変種を取り巻くメタ語用的フレームの一環を成すものについて詳述した。このような社会史的背景の中、第2章で見たようなジェンダー偏差——すなわち、ラボウ派によって主に探究された近現代欧米社会、特にその都市部において繰り返し観察されたジェンダー偏差のパターンとは異なり、正則アラビア語（および近代標準アラビア語）との結びつきは主に男性に見られ、女性は俗語の都市高位変種との結びつきを示しがちであるというパターン——がアラブ世界で広く観察されたのである。そして、さらに、正則アラビア語やアラビア語標準変種へのアクセスに関する、そのようなジェンダー差の結果、権力関係上、相対的な劣位に置かれる女性たちは、たとえばモロッコに見られるように、学歴資本などを持つ女性の場合は、主に、近代性や文明と象徴的な繋がりを持ったフランス語、あるいは、フランス語とアラビア語モロッコ変種とのコード・スイッチングの使用などにより——また、フランス語へのアクセスがあまりない地方の女性の場合にはベルベル語やアラビア語モロッコ変種の女性口承文芸のジャンルを用いることにより——、正則アラビア語を中核とした男性中心主義=家父長的な秩序に対抗しようとする傾向が看取されている⁴⁷¹ (Ennaji and Sadiqi, 2008; Simpson, 2008b: 14; Mendoza-Denton and Osborne, 2010: 116-117; 加えて、Abu-Lughod (1999 [1986]) も参照)。

このような状況を理解するために、まずはモロッコにおけるアラビア語の諸

471 フランス語や英語などの「帝国言語」が、このような機能を担うかたちで女性やマイノリティによって使用されている他の多くの事例については小山 (2022b) で扱っている。

様態を概観したうえで、特に、モロッコとフランス語との関係にまつわる植民地時代以降の特有の状況について簡単に言及しておく必要がある。したがって、以下では、最初に、モロッコにおける、やや独自ともいえるアラビア語の有り様について一瞥する。

モロッコにおけるアラビア語の諸様態：アラブ化、ベドウィン、ベルベル、都市コイネー変種の形成

モロッコなどにおける正則アラビア語とアラビア語標準変種との主要な相違は、音韻と形態統語、両面にわたり、後者の方が、より柔軟である点であるといわれている。たとえば、正則語の *kutubun*（複数の本；主格）が標準語では *kutub* となるなど、後者では、前者に見られる格標示の接辞がないこと、あるいは正則語の【動詞 - 主語 - 目的語】という語順に加え、標準語では（上記のエジプトと同様、そしてフランス語と同じ）【主語 - 動詞 - 目的語】の語順が許されること⁴⁷²、また、標準語はフランス語の単語や句を多く借用していること（例：*dimoqratiya* < *démocratie*; *diinaamiikii* < *dynamique*）、以上のような点が挙げられている。

他方、モロッコ・アラビア語（低位変種；ダリージャ／*darīġa*）の特徴としては、標準変種の *kataba*（彼は書いた）や *saariq*（盗んだ）がそれぞれ *ktəb*⁴⁷³、*sarq*あるいは *sarəq* となるなど、母音の欠落やシュワの多用が見られること、標準語の *‘umma*（国）や *sariqa*（盗み）がそれぞれ *blad* や *xeTfa* となるなど語彙が異なること、そしてモロッコ・アラビア語には、フランス語からの

472 【主語 - 動詞 - 目的語】の語順は特に新聞の見出しに頻出するが、見出しだけでなく本文にも現れるという。この語順は正則アラビア語にも現れるはするが、ここでは、【動詞 - 主語 - 目的語】という無標の、普通の語順に対する有標の変異形となっている（Versteegh, 2014 [1997]: 233-234）。

473 Versteegh (2014 [1997]: 88) も論じているように、モロッコのアラビア語、より一般にはマグリブのアラビア語では、おそらくベルベル語の影響下、歴史的な変化により強勢が語末へと移動している（cf. *kátaba* > *ktəb*）。強勢の置かれない短母音の削除と相俟った、この強勢の位置の変化によって、東方のアラビア語の諸方言とは異なったマグリブのアラビア語諸方言の音声的变化の多くがもたらされている。

借用語（例：table > Table; ampoule > bola）やベルベル語からの借用語（例：tamssumant「努力」、tagzzart「肉屋／屠殺者であること」）が頻出すること、などがある⁴⁷⁴（Ennaji and Sadiqi, 2008: 47-48）。そのような借用語も含め、ベルベル語からの影響もあり、モロッコ俗語アラビア語変種は、他の俗語アラビア語変種とはかなり異なり、特に東方の、たとえばシリアやサウディアラビアなど、レヴァントや湾岸諸国のそれとは相互的な理解可能性はあまり高くないとされている（García with Beardsmore, 2009: 276）。

モロッコ・アラビア語には少なくとも5つの（相互に理解可能な）地域方言変種があるといわれており、それらは、(1) タンジエ、テトワン、ララシェなど北部でしゃべられるシャマル（Šamālī／北）方言、(2) セフルー、フェズ、メクネスなど、中部で用いられるフェズ（ファース）方言（Fāsi）、(3) 同じく中部、ラバトやカサブランカで使われる方言、(4) 南部では、ベルベル語のタシュルヒート方言の影響の強いマラケシュやエッサウィラやアガディールの方言、(5) サハラ地域のハッサニア（Ḥassāniyya）方言、以上である。

（また、Mendoza-Denton and Osborne (2010: 116) は、地域性に限定されない、より大局的で粗い視点から、モロッコで使用されるアラビア語として、①都市モロッコ・アラビア語、②地方モロッコ・アラビア語、③モロッコ南部、サハラのハッサニア方言、④ユダヤ系の用いる／用いたユダヤ・アラビア語⁴⁷⁵（Heath, 2002: 10-12）、⑤近代標準アラビア語、⑥クルアーンの正則アラビア語、以上の6つを挙げている。）

他方、より精度が高く、そして、より歴史的な分類によれば、一般に、モロッコ・アラビア語は、まず先ヒラール（pre-Hilālī）方言とヒラール（Hilālī）方言とに分けられる。前者は、モロッコの北西部で使われ、7世紀から8世紀にかけて最初に当地にやってきたアラブ人の言語変種に起源を持ち、都市（Mdīnī）方言と地方・山岳部方言とに下位分類される。他方、ヒラール方言は、12～13世紀に移住してきたバヌー・ヒラール（Banū Hilāl）部族連合やマア

474 なお、上記のアラビア語語彙のアルファベット表記法は右記の文献のままとした。

475 巻末注117参照。